西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第１４集

上妻遺跡
石貫遺跡
寺崎遺跡
法元遺跡
酒元遺跡
堂ケ島遺跡
童子丸遺跡

平成２年度遺跡所在確認調査（市内遺跡発掘調査）
事業に伴う発掘調査報告書

１９９１.３

宮崎県西都市教育委員会

序

宮崎県のほぼ中央に位置する西都市は、国内でも最大級とされる特別史跡・西都原古墳群をはじめ、奈良時代に置かれた日向国府跡（推定）や日向国分寺同尼寺跡等も保存され、さらに、市内全域には縄文時代や弥生時代文化が偲ばれる土器・石器等が散乱しており、多くの古代遺跡が各所に点在しています。

しかし、近年は、社会構造の進化に伴う諸開発により、自然環境の破壊が深刻になってきていると同時に、人間を取り巻く環境の中でも重要な要素である歴史的環境・文化的環境への影響も懸念されています。ことに、埋蔵文化財への影響は著しく、諸開発によって失われていく遺跡は少なくありません。

このような現状から、遺跡の保護・保存と開発事業との調整に資することを目的として昨年度より重要地域の遺跡所在確認調査を実施しておりますが、本年度は寺崎遺跡・上妻遺跡等従来より古代瓦片が発見されている重要地域（遺跡）を中心に調査を実施しました。

調査の結果、律令時代に関連した遺構・遺物が検出され、さらに、その時代前後の遺構・遺物も多数検出され、大きな成果を得ることができました。

本書が地域の皆様に幅広く活用され、埋蔵文化財に対する認識と理解を深め、古代史解明に少しでも役立てば幸いです。

なお、この調査に際しまして、種々ご協力を賜った土地の所有者の方々、並びに地域住民・関係者の皆様に対し、深く感謝の意を表します。

平成３年３月３１日

西都市教育長　平　野　　平

例　　言

1．　本書は、西都市教育委員会が国庫補助を受けて、平成２年度に実施した遺跡所在確認調査（市内遺跡発掘調査）の発掘調査概要報告である。

2．　本年度は、寺崎遺跡・上妻遺跡・石貫遺跡・法元遺跡・酒元遺跡・堂ケ島遺跡・童子丸遺跡の計７遺跡の発掘調査（トレンチ調査）を実施した。

3．　発掘調査は、西都市教育委員会が実施した。調査組織は次ぎのとおりである。

調査主体　　西都市教育委員会

教　育　長　　平　野　　平

社会教育課長　　清　　郁　男

同文化財係長　　伊　達　博　敏

調　査　員　　日　高　正　晴（西都原古墳研究所長）

蓑　方　政　幾（主事）

調査作業員　　篠原　時江・黒木トシ子・緒方タケ子・久保田要子・長谷川クミエ

藤原　秋子・佐伯　民孝・関屋　敏子・国分　勲

整理作業員　　福田　頼子

4．遺物の実測・トレース・図面の作成は蓑方が行った。

5．本書第３章まとめは日高が執筆し、その他の執筆及び編集は蓑方が行った。

6．本書に示す方位は磁北である。

7．本調査による出土遺物は、西都市歴史民俗資料館にて保存し、展示される。

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　遺跡の位置と歴史的環境 …… 1
第２章　調査の方法と概要 …… 3
第３章　まとめ ……24

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 ……
第２図　発掘調査地点（トレンチ）位置図 ……11～12
第３図　童子丸遺跡Ｃ地点遺構分布図 ……13
第４図　寺崎遺跡Ｅ地点遺構分布図 ……14
第５図　寺崎遺跡Ｅ地点　第１トレンチ及び第３トレンチ平面・土層図……15
第６図　法元遺跡Ｈ地点遺構分布図 ……16
第７図　上妻遺跡Ｉ地点遺構分布図 ……17
第８図　出土遺物実測図（Ａ地点・Ｃ地点） ……18
第９図　出土遺物実測図・拓影（Ｅ地点） ……19
第10図　出土遺物実測図・拓影（Ｅ地点） ……20
第11図　出土遺物実測図・拓影（Ｅ地点） ……21
第12図　出土遺物実測図・拓影（Ｇ地点　Ｈ地点　Ｉ地点）……22
第13図　出土遺物実測図・拓影（Ｉ地点） ……23

図　版　目　次

図版１　遺構・遺物検出状況 ……29
図版２　遺構・遺物検出状況 ……30
図版３　出土遺物 ……31
図版４　出土遺物 ……32
図版５　出土遺物 ……33

1：25,000

500m　0　500　1000　1500

1. 西都原古墳群（風土記の丘）
2. 丸山遺跡
3. 西都原遺跡
4. 寺原遺跡
5. 原口遺跡
6. 諏訪遺跡
7. 国分遺跡
8. 日向国分寺跡
9. 上宮遺跡
10. 上宮古墳
11. 上宮城跡
12. 上尾筋遺跡（前年度調査）
13. 下尾筋遺跡（前年度調査）

※14. 石貫遺跡
※15. 童子丸遺跡
16. 上園古墳３号
17. 上園古墳２号
18. 上園古墳１号
※19. 堂ケ島遺跡
※20. 法元遺跡
※21. 寺崎遺跡
※22. 上妻遺跡
23. 経塚
※24. 酒元遺跡

第１図　遺跡位置図

第１章　はじめに

第１節　　調査に至る経緯

西都市市街地の北西部の西都原台地上には特別史跡西都原古墳群が存在し、また、その南側中間台地には奈良時代に置かれた日向国府跡（推定）や日向国分寺同尼寺跡等も保存され、西都市は古代より政治・文化の中心地として栄えていたところであり、日向国の古代史研究上最も重要な地位を占めている。

さらに、西都原台地の東側中間台地も分布調査等によって多量の土器片とともに布目瓦が発見され、律令時代に関連した遺構の存在が想定されることから、重要地域として注目される。一方、西都市では、昭和３９年よりまちを全面的に造り変える都市計画事業に着手、昭和５５年には公共下水道事業を進めているほか、農村部の基盤整備として一ツ瀬川総合開発事業や農村基盤総合事業等などを市の二大施策として取り組み、「調和のとれた〈まち〉づくり」に向けて着実に発展している。現在もこれらの事業に伴い各種の工事が実施されているが、中でも区画整理事業は大規模な事業の一つで、市街地についてはほぼ完了し、今後は中間台地を含めた周辺地域の事業が実施されると予測される。また、これらの事業に伴い市街地はもとより周辺地域も住宅建設が急ピッチに進められている。

このような諸開発によって遺構等へ影響も懸念されることから、開発の予測される中間台地を中心に、遺跡の保護と開発事業との調整に資することを目的として調査を実施した。この調査は西都市教育委員会が受けて実施した国庫補助事業で、昨年度より実施しているが、昨年度の調査では貴重な遺構・遺物が検出され大きな成果をあげることができた。

本年度は、従来より布目瓦が発見され重要地域として注目されている、西都原台地の東側中間台地に所在する上妻遺跡・寺崎遺跡・法元遺跡・童子丸遺跡・石貫遺跡・堂ケ島遺跡・酒元遺跡を対象に計１３ヶ所の発掘調査を実施した。

調査は、平成２年６月１８日に着手し、同年１０月１１日に終了した。

第２節　遺跡の位置と歴史的環境

西都市は、宮崎県のほぼ中央部に位置する内陸都市で、山地が多く市面積の約７７％が林野で占められている。

西都市の平坦地形は、西方に九州山地を背負った形容を表し、市街地の東端を南流する一ツ瀬川と、支流の三財川・三納川とが沖積地の低地を潤し、豊かな農地が形成されている。

これら河川流域には、九州山地から岬様に丘陵が幾条にも延びていて、北方より茶臼原台地・西都原台地・百塚原台地・小豆野台地・六野原台地と大別することができる。

本年度対象になった調査地区は、西都原台地と東側眼下に広がる沖積地（西都平野）に挟まれた中間微高地であり、標高４０ｍ程で沖積地とは２５ｍの比高差がある。

この西都原台地には古墳で周知されている西都原古墳群が点在しているが、対象地内にも未指定古墳３基を含む２２基（西都原古墳群１９基）の古墳が点在している。

また、西都平野東側を南流している一ツ瀬川左岸台地上には新田原古墳群（新富町）・茶臼原古墳群・上穂北古墳群が点在し、同台地斜面には、横口式石室を有する千畑古墳や千畑・上江・杉尾等の各横穴墓群が点在している。

さらに、西都原台地南側の中間微高地には、奈良時代に置かれた日向国府や日向国分寺同尼寺跡等が保存され、西都市が古代より日向国の政治・文化の中心地だったことを物語っている。

この西都原台地南側の中間微高地（上尾筋遺跡・下尾筋遺跡[1]）については、昨年度遺跡所在確認調査を実施して、これらを裏づけするような資料と共に弥生時代中期～後期後半にかけての遺構・遺物を中心に多量の土器及び遺構が検出され、多大な成果を上げることができた。

調査対象地内においては、縄文時代早朝の貝殻条痕文土器（前平式土器）や炉跡（集石遺構）が検出された原口遺跡[2]（昭和３１年度調査）、古墳時代中期～後期の住居址等の遺構や土器片が検出された酒元遺跡[3]（昭和６３年度調査）などがあり、昭和６０年度実施した遺跡詳細分布調査[4]及び表採においても多量の土師器片とともに古代瓦片が、また、昭和６３年度より県教育委員会で実施されている国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査[5]においても布目瓦が発見され、さらに、一説によると[6]、日向国府の推定地ともなっていることから、重要地域として注目されている。

註

（１）西都市教育委員会「上尾筋・下尾筋遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第１１集　１９９０

（２）西都市『西都の歴史』　１９７６

（３）西都市教育委員会「酒元遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第８集　１９８９

（４）西都市教育委員会『西都・遺跡詳細分布調査報告書』　１９８６

（５）宮崎県教育委員会『国衙・郡衙　古寺跡等遺跡詳細分布調査概要報告書』Ⅰ　１９８９

（６）木下　良「西都原古墳群と日向国府」『地形図に歴史を読む』大明堂　１９７２

第２章　調査の方法と概要

本年度は、昨年度に比して調査対象地域（昨年度～３０，０００㎡・本年度～５０，０００㎡）が広く調査地の選定には苦慮したが、踏査による遺物の散布状況及び昭和６０年度実施した遺跡所在確認調査の結果等もふまえ、また、多くの地主の方のご協力を得て１３ヶ所の発掘調査（トレンチ調査）を実施した。

調査は、幅１ｍのトレンチを対象面積に応じて設定し、アカホヤ層を基準とした遺構検出作業を中心に実施した。

基本土層は、各遺跡で若干異なるものの、基本的には第Ⅰ層が表土（耕作土）・第Ⅱ層が黒色土・第Ⅲ層がアカホヤ層・第Ⅳ層が黒褐色ローム（硬質）・第Ⅴ層が褐色ローム（柔質）・第Ⅵ層が黒褐色ロームである。

なお、調査箇所は順次Ａ～Ｌ地点とした。

童子丸（どうじまる）遺跡Ａａ地点

童子丸遺跡は、対象地の北側で台地縁辺部に位置している。同遺跡内には、３基の未指定の円墳（第１図１６・１７・１８）が点在しているが、Ａａ地点の一角にも小高い丘陵があり、古墳の可能性があることから、周溝の確認を中心に調査を実施した。トレンチは、ほぼ南北に３本設定した。

調査の結果、古墳の周溝と思われる遺構と葺石を確認することができた。周溝は幅約６ｍ・基台との差は約４０㎝で、周辺溝内側には葺石のいちばん下段と思われる長さ３０～４０㎝の石が一列に配されていた。このようなことから、周溝を含めると３０ｍ前後の古墳で、現在はその内の東側半分程が残存していると推定される。

その他、溝状遺構・柱穴等が検出されているが、遺物から奈良・平安時代の遺構と推定される。

遺物は、土師器が主体で４５０点出土し、その他須恵器・青磁・陶器・平瓦が出土しているが、注目されるのは、ただ一片で小片ではあるものの凹面に横方向の縄目の叩きを施し、凸面に布目を残す平瓦が出土していることで、古寺跡等の存在も考えられることから他遺跡出土の瓦と比較しながら今後検討していかなければならないと思われる。

童子丸遺跡Ａｂ地点（第８図）

Ａｂ地点はＡａ地点とは道路を隔てた南側に位置し、対象面積４８０㎡、南北に３本のトレンチを設定し調査に入った。結果、配石状遺構（第１トレンチ）・柱穴（第１～３トレンチ）に加え不整形の遺構（第３トレンチ）を検出した。この不整形の遺構は、遺構及び遺物の出土状況等から住居址が切合しているのではないかと推定されるが、幅１ｍのトレンチ調査であり、判断が難しい。時代的には、奈良～平安時代に比定される。

また、配石遺構は、第１トレンチ南側より検出した。幅１ｍ・長さは確認しているところで５ｍ以上あるが、染付などの磁器片や瓦片が出土しているので、近世～近代にかけての遺構と推定される。何の遺構かについては不明である。

遺物は、Ａａ地点同様土師器が主体で、須恵器・陶器・白磁・青磁・染付・布痕土器・石錘が出土している。土師器は、坏・皿片が多く、底部はヘラ切り底・糸切り底があり、奈良～平安時代のものと思われる。

１・２はともに口縁径８．５㎝・器高１．８㎝を計り、底部はヘラ切り、ヨコナデ調整の皿である。微砂粒を含み、浅黄橙色を呈している。

層の残存状況は、第Ⅲ層のアカホヤ層以下が残存している。

童子丸遺跡Ｂ地点

童子丸遺跡の南部、Ａｂ地点の１００ｍ西側に位置している。対象面積４１０㎡、東側に接して未指定古墳（上園古墳１号）が点在している。この古墳は、東西１５ｍ、南北２５ｍ楕円形状を呈している。トレンチは、古墳の周溝確認のための小トレンチ２本を含め５本設定し調査に入った。結果、第１トレンチ及び第４トレンチより周溝状の遺構を確認したが、幅２．５ｍ・深さ１ｍとやや小さく、トレンチ間を結んでみると直線的で、方向的にもそぐわないことから、この古墳に伴った遺構ではないと推定されるが、当古墳が前方後円墳の可能性もあり、判断が難しい。

その他、遺構は溝状遺構・円形土坑・柱穴・配石状遺構等を検出したが、共伴遺物から中近世の遺構と思われる。

遺物は、土師器・須恵器・陶器・白磁・青磁・染付・陶器が出土している。

層の残存状況は、アカホヤ層は確認されず、第Ⅳ層の黒褐色ローム以下が残存しており、浅いところで６０㎝で礫層が確認される。

童子丸遺跡Ｃ地点（第３図・第８図）

童子丸遺跡の北端、台地縁辺部に位置している。対象面積１，２８０㎡、作物の関係で畑の両サイドにほぼ東西に３本のトレンチを設定して調査に入った。結果、住居址・溝状遺構・土坑・柱穴を検出した。

住居址は、第１トレンチより２軒検出したが、１号住居址は一辺４ｍの方形プランの竪穴式住居址で、住居址内より甑（第８図５）・把手及び注口のついた甕型土器（第８図６）・丸底の甕型土器・平行叩きを有する広口壺や須恵器のⅢｂ期に相当する坏が出土しており、器形等から６Ｃ後半頃と思われる。２号住居址も方形プランで、共伴遺物より同時期の住居址と思われる。住居址はいずれもアカホヤ下層の黒褐色ロームまで掘り込まれており、アカホヤ層上面からは１号住居址で１５㎝・２号住居址で２５㎝を計る。なお、第１トレンチ中央部に土器片が集中して出土しているところがあるが、

出土状況から上部が撹乱によりほとんど削平された住居址の可能性が強い。溝状遺構は、第１トレンチ及び第２トレンチにかけて２条検出している。共伴遺物は土師器があるが、埋土の状態、さらに以前は当地に家屋が建っていたとのことから混入の可能性もあり、時代的なことは判断が難しい。１号溝状遺構が幅２．１ｍ・深さ０．５ｍ、２号溝状遺構が幅０．６ｍ・深さ０．２５ｍを計る。

遺物は、土師器が圧倒的に多く、全体の９０％以上を占め（９４０点）、その他須恵器・陶器・染付・瓦器・石斧が若干出土している。

４は内外面丁寧なヘラ磨き調整された坏で、胎土はこまかく赤褐色を呈し、口縁径１４．５㎝・器高３．７㎝を計る。５は底部に直径６．２㎝の円孔を施し、胎土も３～５㎜大の砂粒を多く含み、粘土紐の継目痕も観察できる浅黄橙色を呈した甑で、口縁径２９㎝・器高２４．５を計る。６は把手・注口が施されている平底の甕型土器で、５と同様胎土もあらく、浅黄橙色を呈し、口縁径１６㎝・底部径８．３２㎝・器高１３．３㎝を計る。７は赤褐色を呈した脚部径１６．３㎝の高坏であるが、坏部が欠損している。４を除いて１号住居址より出土したものである。

層の残存状況は、第Ⅱ層の黒色土、第Ⅲ層のアカホヤ層以下が残存している。

石貫（いしぬき）遺跡Ｄ地点

石貫遺跡は童子丸遺跡の西側、中間台地の北部に位置している。調査地はその中央部で、対象面積６７０㎡であるが、作物の関係でＬ字型のトレンチとなった。結果、遺構として溝状遺構・柱穴を検出した。時代的なことは、わずかではあるが土師器等が出土しており、奈良～平安時代の遺構と思われる。溝状遺構は、幅０．４ｍ・深さ０．１５を計る。　遺物は、量的には少なく総計１８点で、土師器・須恵器・青磁・布痕土器が出土している。

層の残存状況は、第Ⅱ層の黒色土、第Ⅲ層のアカホヤ層以下が残存している。

寺崎（てらさき）遺跡Ｅ地点（第４図・第５図・第９～11図）

寺崎遺跡は、中間台地のほぼ中央部に位置し、従来より各地から古代瓦片が発見され、都萬神社に近いところから上妻遺跡とともに国府の推定地[1]ともなっている重要地域である。

調査地は、寺崎遺跡の南部で、西都市立妻北小学校の北側にあたる。対象面積６３５㎡、中央にビニールハウスがあることから、その両サイドにトレンチを設定し、調査に入った。調査の結果、住居址・溝状遺構・柱穴群・不整形土坑等の遺構と多量の遺物を検出した。

住居址は、第１トレンチより３軒、第２トレンチより１軒検出しているが、いずれも方形プランの竪穴式住居址と思われ、１号住居址は一辺４．５ｍ・２号住居址は一辺５．０ｍ程と推定される。３号・４号住居址は推定が不可能である。共伴遺物より１号住居址・２号住居址は５Ｃ中頃、３号住居址は６Ｃ後半に比定される。４号住居址は共伴遺物がなく不明である。黒色土よりアカホヤ下層の黒褐色ローム層まで掘り込まれている。なお、３号住居址は藤掛遺跡[2]（新富町）等近年類例が増えてきた、

炉跡に土師器甕を埋めるタイプの住居址であり、埋甕の周囲には焼土が観察できた。

溝状遺構は５条検出されているが、１～４号については共伴遺物がほとんどなく、時代的なことは判断が難しい。ただ、土層及び遺構の検出状況から奈良時代以前の遺構であることは推定できる。５号溝状遺構は、第２トレンチから検出しているが、溝内からは完形の高台付坏をはじめ多量の土器片及び布目瓦片等が出土している。幅１．６ｍ・深さ０．５ｍ、ほぼ南北に延び、埋土は灰白色粘質土が多量に混入している。時代的には、奈良～平安時代に比定される。

柱穴は、各トレンチより検出しているが、特に第３トレンチに集中している。すべて円形の柱穴で、大きいもので（Ｐ９）直径０．７５ｍ・深さ１．０ｍを計る。しかも、この柱穴内からは完形の坏をはじめ多量の土師器片や布目瓦片が出土している。これら柱穴の中には、平行に並んで検出されているものもあるが、トレンチ調査であり、４間以上ということだけで規模的なことが確認できなかったのは残念である。しかし、これら柱穴群の検出は、大規模的な掘立柱建物の存在が想定され注目される。

土坑は、第２トレンチより検出しているが、不整形であり、壁面は傾斜している。土坑内より土師器や布目瓦片が出土しているが、用途等については不明である。

遺物は、総計３，０００点程出土しているが、その７５％にあたる２，５００点は土師器で、その他、縄文土器・須恵器・布痕土器・青磁・古代瓦・石斧・石錘・土錘等が出土している。注目されるのは、古代瓦片[3]が約３００点も出土していることで、いくつかに分類することができる。その詳細な分類については本報告に譲るとして、代表的なものを第１０図・第１１図に抽出している。

８．９は１号住居址より出土した高坏で、胎土も粗く、浅黄橙色を呈している。脚部径８は１２．７㎝、９は１３．１㎝を計るが、両方とも坏部を欠損している。１０は把手の残欠片で、線刻を施している。１１は３号住居址より出土した土師器甕で、胎土も３～５㎜前後の砂粒を多く含み、粘土紐の継ぎ目を観察できる。胴上部は赤味を帯び、脆弱化している。調整は不明瞭で、全体的には淡橙色を呈している。１２～１４はＰ（柱穴）９より出土した坏で、完形品である。１２は器厚が薄く口縁径１１．９㎝・底部径６．０㎝・器高４．７㎝、１３は口縁径１２．４㎝・底部径７．０㎝・器高４．５㎝、１４は口縁径１２．２㎝・底部径７．０㎝・器高４．５㎝を計る。胎土は微砂粒を含み、調整はヨコナデ、浅黄橙色を呈している。底部と体部との境は明瞭で、外方向へ直線的に立ち上がり、１５・１６は土師器の高台付坏の高台部分で、内側にヘラ状のもので花弁状に文様を施している。高台は低く、胎土は微砂粒を含み、調整はヨコナデ、浅黄橙色を呈している。１７～２０は須恵器坏蓋で、１８・２０は須恵のⅥ期、１９はⅦ期に相当する。胎土は微砂粒を含み、調整はヨコナデ、灰色を呈している。２１は高台付の須恵器坏で、底部より丸みを持ちながら立ち上がり、口縁部付近でやや外反し端部に至る。胎土は微砂粒を胎土は微砂粒を含み、調整はヨコナデ、灰色を呈している。２２．２３は５号溝状遺構より検出されたもので、高台付の土師器坏である。２２は高台部分が極端に高く３㎝もある。高台の直径２０．３㎝、内湾ぎみに立ち上がっている。体部は外方向に直線的に立ち上がり、端部は丸い。胎土はこまかく、調整はヨコナデ、橙色を呈している。２３は高台及び口縁部を欠損している。

高台はやや低く１．５㎝、体部は外方向に直線的に立ち上がっている。胎土はこまかく、調整はヨコナデ、橙色を呈している。２４．２５は土錘で、２４は最大長４．４㎝・最大幅１．０㎝、２５は最大長６．３㎝・最大幅１．６㎝を計る。いずれも第１トレンチ出土である。２５は第１トレンチ出土の半磨製石斧で、頁岩製である。

Ｅ地点からは以上の遺物が出土している他、縄文土器等も出土しており、当地が古くから生活の適地として利用していたことがうかがわれる。

層の残存状況は、第Ⅱ層の黒色土、第Ⅲ層のアカホヤ層、第Ⅳ層の黒褐色ローム、第Ⅴ層の褐色ローム以下が残存する。なお、当遺跡で第Ⅱ層とした褐色土には、礫とともに多量の土師器及び布目瓦片が混入している。

寺崎遺跡Ｆ地点

Ｆ地点はＥ地点の３０ｍ程南に位置し、場所が狭小により短いトレンチしか設定できなかった。

結果、溝状遺構を２条検出したが、共伴遺物に乏しく時代的なことは不明である。

遺物は、土師器７０点・布目瓦４０点のほか縄文土器・須恵器・陶器・青磁・染付・布痕土器がわずかに出土している。

層の残存状況は第Ⅱ層の黒色土、第Ⅲ層のアカホヤ層以下が残存する。

酒元（さかもと）遺跡Ｇ地点（第１２図）

酒元遺跡は、調査対象地域の南端に位置し、地形的には南北に中央を貫通している県道の東側が中間台地、西側が２段状の高台になっている。本調査は住宅建設に伴い急遽実施した遺構確認調査で、対象面積３００㎡、５ヶ所に小トレンチを設定して調査に入った。結果、第２・第３トレンチにおいて、礫群及び集石遺構と思われる遺構を検出した。この礫群については、調査地のすぐ南側が一段下がっており、その壁面にも確認できた。遺物はわずか１点のみではあるが、縄文早期の貝殻条痕文土器が出土しており、また、出土状況等により同時期に比定される遺構と思われる。

３４は第４トレンチより出土したもので、長さ９．５㎝・幅４．８㎝・厚さ１．７㎝を計る頁岩製の打製石斧である。

層の残存状況は第Ⅳ層の黒褐色ローム以下が残存する。

法元（ほうが）遺跡Ｈ地点（第６図・第１２図）

法元遺跡は、童子丸遺跡と寺崎遺跡に挟まれた遺跡で、対象地域の北東部に位置している。対象面積１，６３０㎡、東西に２本のトレンチを設定して調査に入った。結果、住居址・溝状遺構（土坑？）を検出した。

住居址は第１トレンチより５軒検出しているが、いずれも方形プランの竪穴式住居址である。規模

が判断できるのは２号住居址と４号住居址で、２号住居址は７．０ｍ・４号住居址は一辺４ｍを計る。いずれも住居址は、アカホヤ下層の黒褐色ロームまで掘り込まれており、遺構内埋土はアカホヤ層ブロック混じりの黒色土である。時代的なことは、共伴遺物に乏しく、判断に苦しむが、一括遺物として多量の土師器坏に加え土師器高台付坏・須恵器高台付坏等が出土しており、これらの遺物から判断すると奈良～平安時代に比定できる。なお、１号住居址は炉跡に土師器甕を埋めるタイプのもので、埋甕が出土している。

溝状遺構は、第２トレンチより検出しているが、遺構内には１５㎝～４０㎝大の石が多量に検出された。投入されたのではないかと思われるが、遺物としては陶器・染付に加え砥石や石臼等も含まれているので、近世～近代の遺構と推定される。

遺物は圧倒的に土師器が多くの全体の８０％にあたる５００点、その他縄文土器・須恵器・陶器磁器・染付・石錘・石臼等が出土している。

３５は口縁径１０．５㎝・底部径７．０㎝・器高１３．２㎝、上げ底の小型甕で、暗褐色を呈している。３６は口縁径１１．２㎝・高台径４．２㎝・器高５．３㎝、器厚の薄い茶碗で、黒褐色を呈している。３７は口縁径９．２㎝・高台径４．９㎝・器高６．７㎝、器厚の厚い小鉢で、明緑灰色を呈している。いずれも溝状遺構内出動である。３８・３９とも長軸に打ち欠きを有するタイプの石錘で、砂岩製のものである。４０は長さ４．６㎝・直径２．０㎝の土錘である。３８～４０第１トレンチ出土である。

層の残存状況は、黒色土が当調査地では第Ⅳ層にあたり、以下アカホヤ層、黒褐色はローム層と残存している。

上妻（かみづま）遺跡Ⅰ地点（第７図・第１２図）

上妻遺跡は、寺崎・法元遺跡の東側、中間台地の東側に位置している。遺跡の南部には、木花開耶姫を主神とする都萬神社があり、また、律令時代においては、この地方を中心にして勢力を有していた日下部氏の本拠地域であり、たいへん興味深いところである。

調査地は、その都萬神社の北側にあたり、対象面積１，４４０㎡であるが、調査地の東側半分は間道を重機によって埋め立てたところで、すでに撹乱されていることから、西側半分に東西に２本の小トレンチを含めて３本のトレンチを設定して調査に入った。

調査の結果、地表下２０㎝程に非常に硬い土層と、敷石遺構を検出した。この硬質の土層については、版築ではないのかとの御教示[4]を得たが、狭小のトレンチであり、また、版築と確実に決定づけられる資料に乏しく、ここでは版築状遺構としたい。なお、版築状遺構内からは複弁１２葉蓮華文軒丸瓦（第１２図４２）が出土しているが、福岡大学の小田富士雄教授より肥後系の軒丸瓦ではなかろうかとのご教示を得ている。

敷石遺構は、版築状遺構の東端に敷かれ、この遺構が版築状遺構の周囲を巡っているのではと思われたが、延長線上に小トレンチを入れた結果、確認できなかった。最初のトレンチの敷石遺構の部分

を拡幅したところ、長さは２．５ｍしか確認できなかった。この敷石遺構は何の遺構であるかは不明であるが、西側一帯には敷石とともに土師器・須恵器及び布目瓦片が出土しており、律令時代における何らかの遺構に関係があるのではなかろうか。なお、布目瓦の詳細については、第１２図に図示しているが、特徴として格子目叩文が主体をなしていることで、前途した寺崎遺跡Ｅとは異なった様相を呈している。

遺物は、布目瓦が全体の約５０％（１００点）を占め、その他土師器・須恵器・陶器・石錘・石斧等が出土している。

上妻遺跡Ｊ地点

Ｉ地点の１００ｍ北側に位置している。南北に１本のトレンチを設定して調査に入った。

調査の結果、土坑・柱穴群及び配石遺構を検出した。土坑・柱穴群は共伴遺物から奈良～平安時代の遺構と推定されるが、配石遺構は出土状況及び共伴遺物等から近世～近代の遺構と推定される。

遺物は、土師器が全体の約９０％を占めているが、Ｉ地点同様格子目叩文の布目瓦が出土しており、Ｉ地点に関連した遺構の範囲が１００ｍ離れた当地点までは確認されたことになる。その他、わずかではあるが、須恵器・陶器・磁器・染付等が出土している。

層の残存状況は、アカホヤ層は確認できず、第Ⅳ層の黒褐色ローム以下が残存している。

法元遺跡Ｋ地点

Ｈ地点の北西５０ｍ、対象面積６００㎡に東西１本のトレンチを設定して調査に入った。結果、住居址・土坑・柱穴及び小ジャリを長さ不明・幅３．５ｍ・厚さ０．１ｍに敷き詰めた遺構を検出した。この遺構は何の遺構であるかは不明であるが、小ジャリに混じって格子目叩文の布目瓦が出土しており、律令時代に関連した遺構の可能性が強い。

住居址は、角の一部分ではあるが、方形プランのものと想定できる。時期的には出土遺物より奈良～平安時代に比定される。

遺物は、土師器・須恵器・布目瓦・布痕土器等が出土している。

層の残存状況は、第Ⅱ層の黒色土（当遺跡では第Ⅳ層）、第Ⅲ層のアカホヤ層、第Ⅳ層の黒褐色ローム以下が残存している。

堂ケ島（どうがしま）遺跡Ｌ地点

堂ケ島遺跡は、西都原台地西側縁辺下に広がる遺跡で、各所に古墳（西都原古墳群）が点在している。

調査地は、堂ケ島遺跡のほぼ中央、対象面積５００㎡の畑地である。東西に１本のトレンチを設定して調査に入った。結果、Ｖ字溝・溝状遺構・変形土坑・柱穴を検出した。

Ｖ字溝は調査地の東側から検出したが、幅１．２ｍ・深さ０．７５ｍ・長さは現在確認しているところで１４ｍ、まだ対象地外へ延びているようである。共伴遺物として、土師器甕・土師器高坏等が出土しており、形態等の特徴より古墳時代前半に比定できる。その他の遺構は、出土遺物より奈良～平安時代の遺構と思われる。

遺物は、土師器がほとんどで、胎土の粗い古墳時代前半に比定される土師器甕やヘラ削りの底部を有する坏・高台付坏等が出土しており、時期的な差がある。

層の残存状況は、第Ⅱ層の黒色土、第Ⅲ層のアカホヤ層、第Ⅳ層の黒褐色ローム以下が残存している。

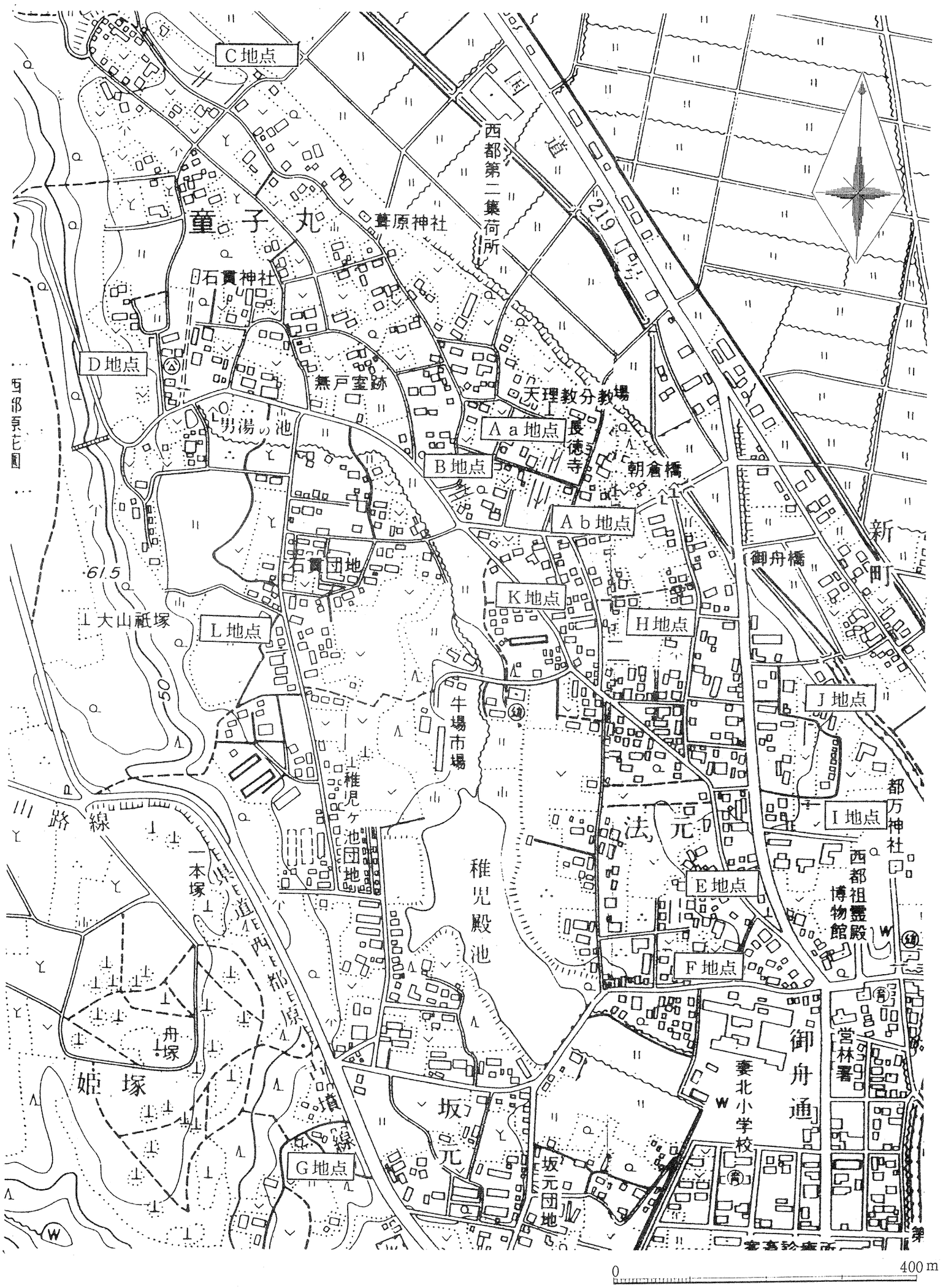
註

（１）木下　良「西都原古墳群と日向国府」『地形図に歴史を読む』　大明堂　１９７２

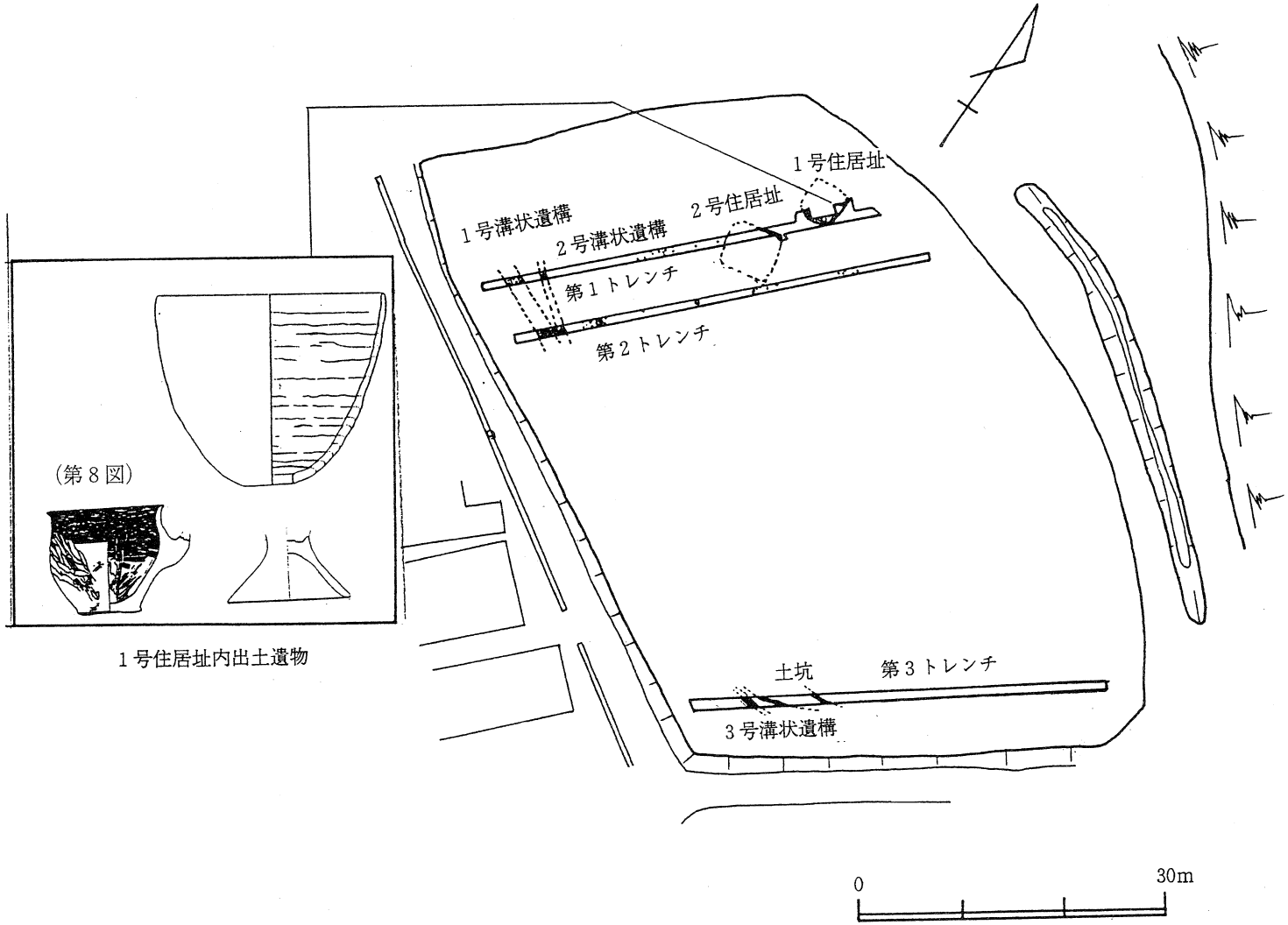
（２）新富町教育委員会「藤掛遺跡」『新富町文化財調査報告書』第２集　１９８３

（３）出土した布目瓦については、福岡大学の小田富士雄教授よりご教示を得た。また、これらの詳細及び土器の編年等については、県文化課の長津宗重氏よりご教示を得た。

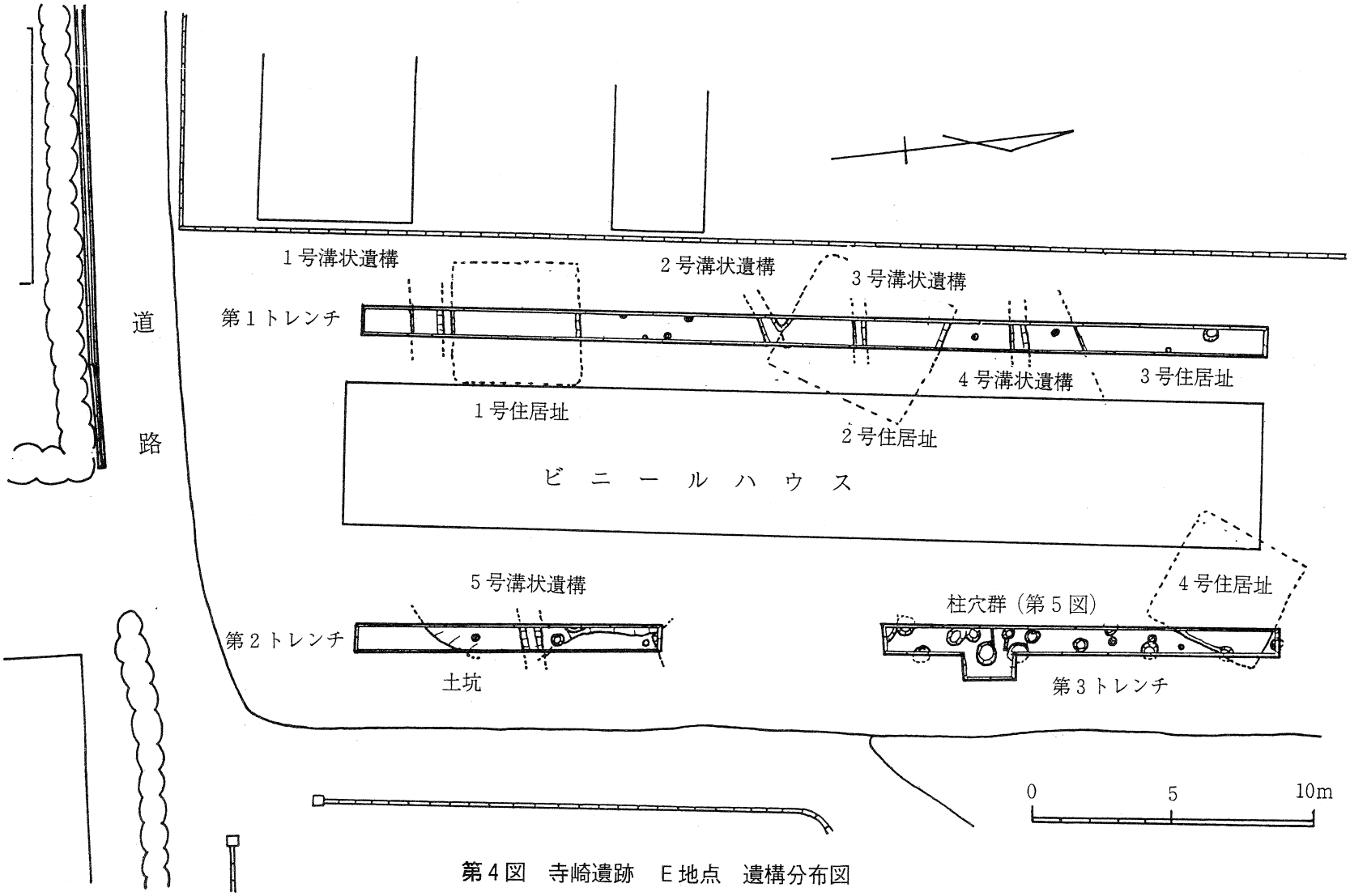
（４）版築については、県文化課の長津宗重氏よりご教示を得た。



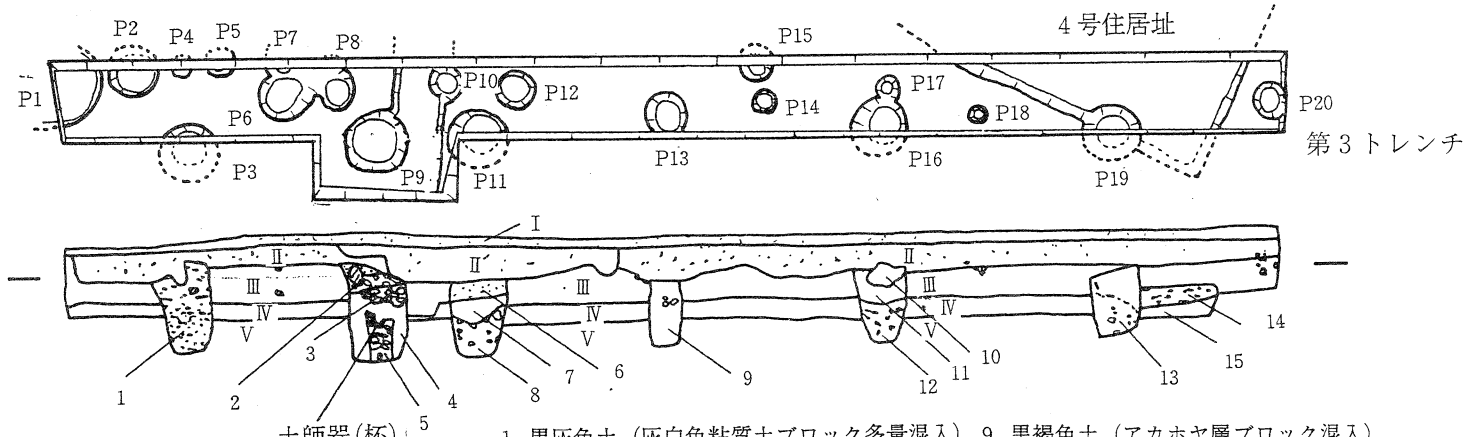
第2図発掘調査地点（トレンチ）位置図



第3図童子丸遺跡C地点遺構分布図

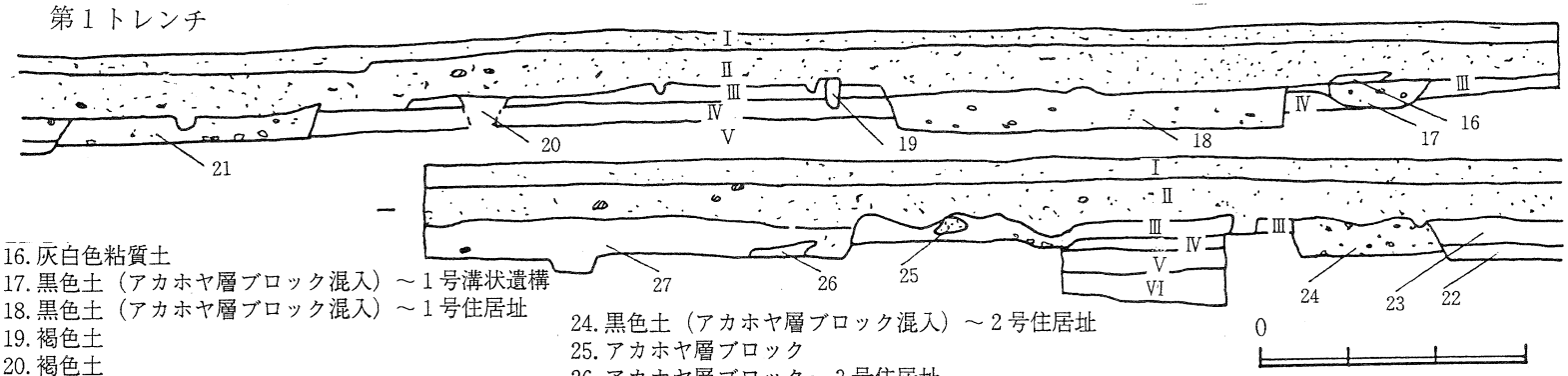


第4図　寺崎遺跡　E地点　遺構分布図



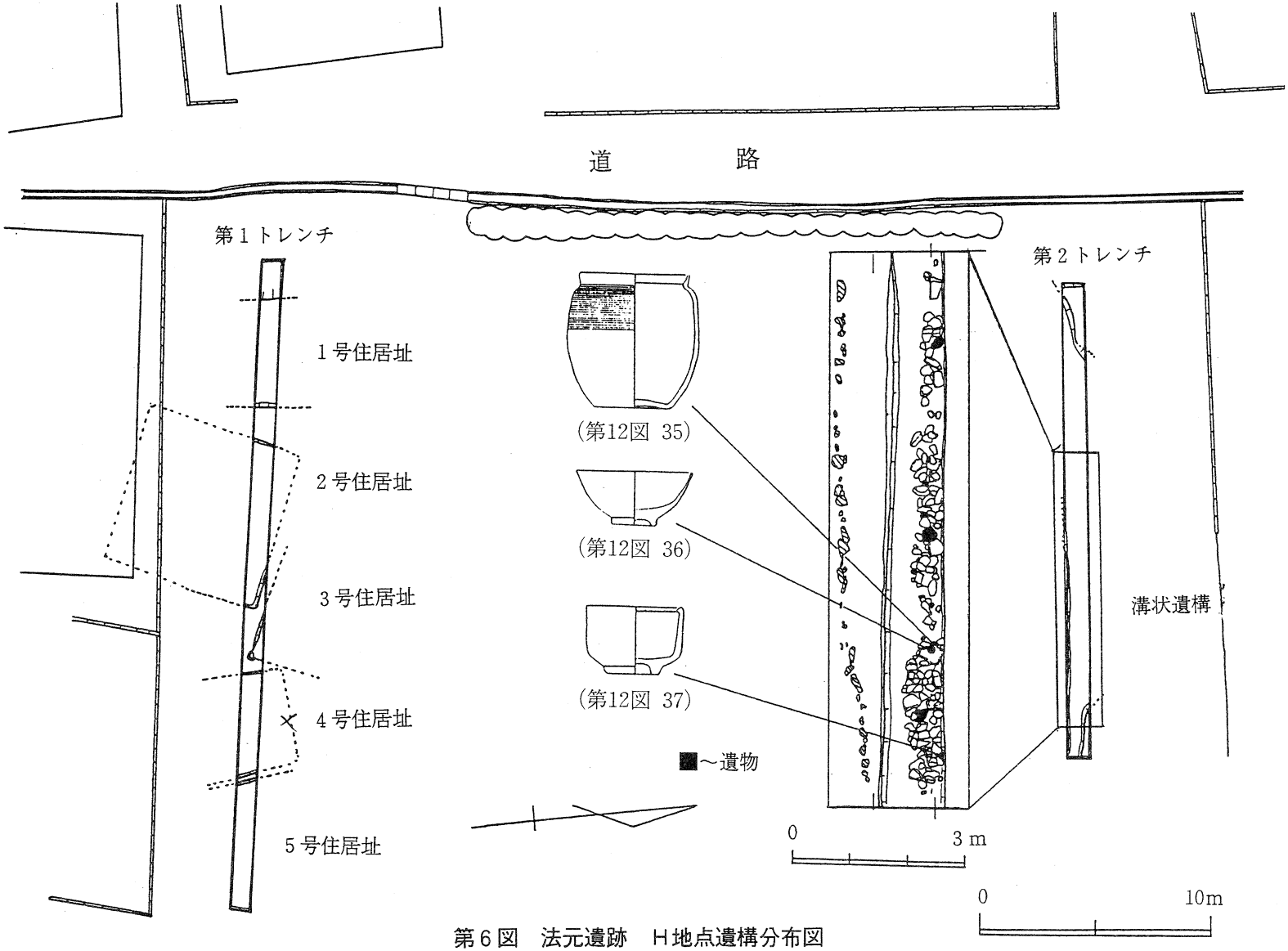
Ⅰ.表土（耕作土）
Ⅱ.褐色土（土器片多量混入）
Ⅱ.撹乱層（トレンチャー）
Ⅲ.黒色土
Ⅳ.アカホヤ層
Ⅴ.黒褐色ローム層
Ⅵ.褐色ローム層

1.黒灰色土（灰白色粘質土ブロック多量混入）
2.灰白色粘質土
3.黒灰色土（灰白色粘質土ブロック多量混入）
4.黒灰色土（灰白色粘質土ブロック混入）
5.黒灰色土（灰白色粘質土ブロック多量混入）
6.黒色土（灰白色粘質土ブロック混入）
7.黒色土
8.黒色土（アカホヤ層ブロック混入）
9.黒褐色土（アカホヤ層ブロック混入）
10.灰白色粘質土
11.黒色土
12.黒色土（アカホヤ層ブック混入）
13.黒色土（アカホヤ層・灰白色粘質土ブロック混入）
14.黒色土（アカホヤ層ブロック混入）
15.黒色土（14と同様3号住居址埋土）

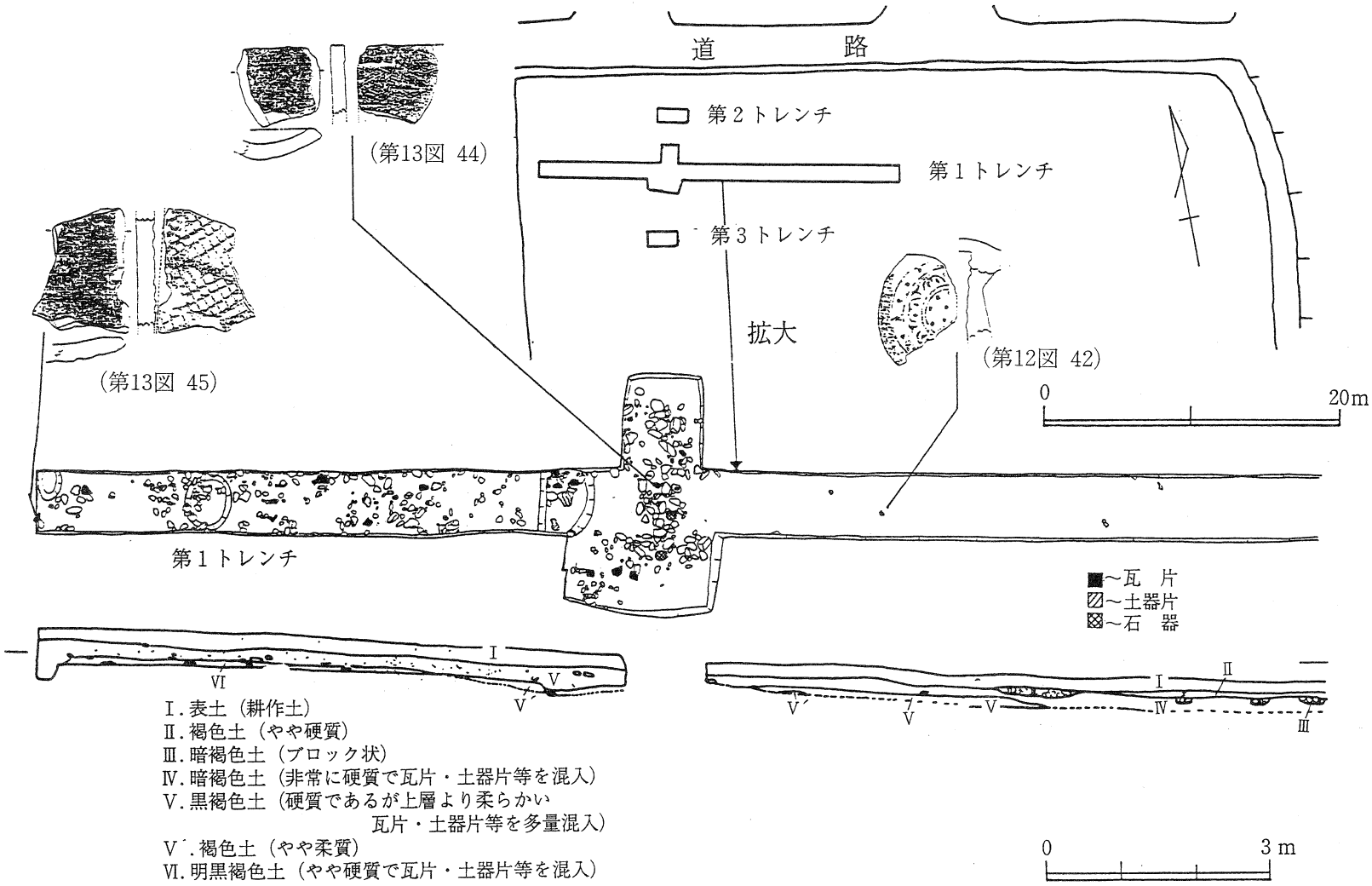


16.灰白色粘質土
17.黒色土（アカホヤ層ブロック混入）～1号溝状遺構
18.黒色土（アカホヤ層ブロック混入）～1号住居址
19.褐色土
20.褐色土
21.黒色土（アカホヤ層ブロック混入）～2号住居址
22.褐色土～3号溝状遺構
23.黒褐色土～3号溝状遺構
24.黒色土（アカホヤ層ブロック混入）～2号住居址
25.アカホヤ層ブロック
26.アカホヤ層ブロック～3号住居址
27.黒色土（アカホヤ層ブロック混入）～3号住居址

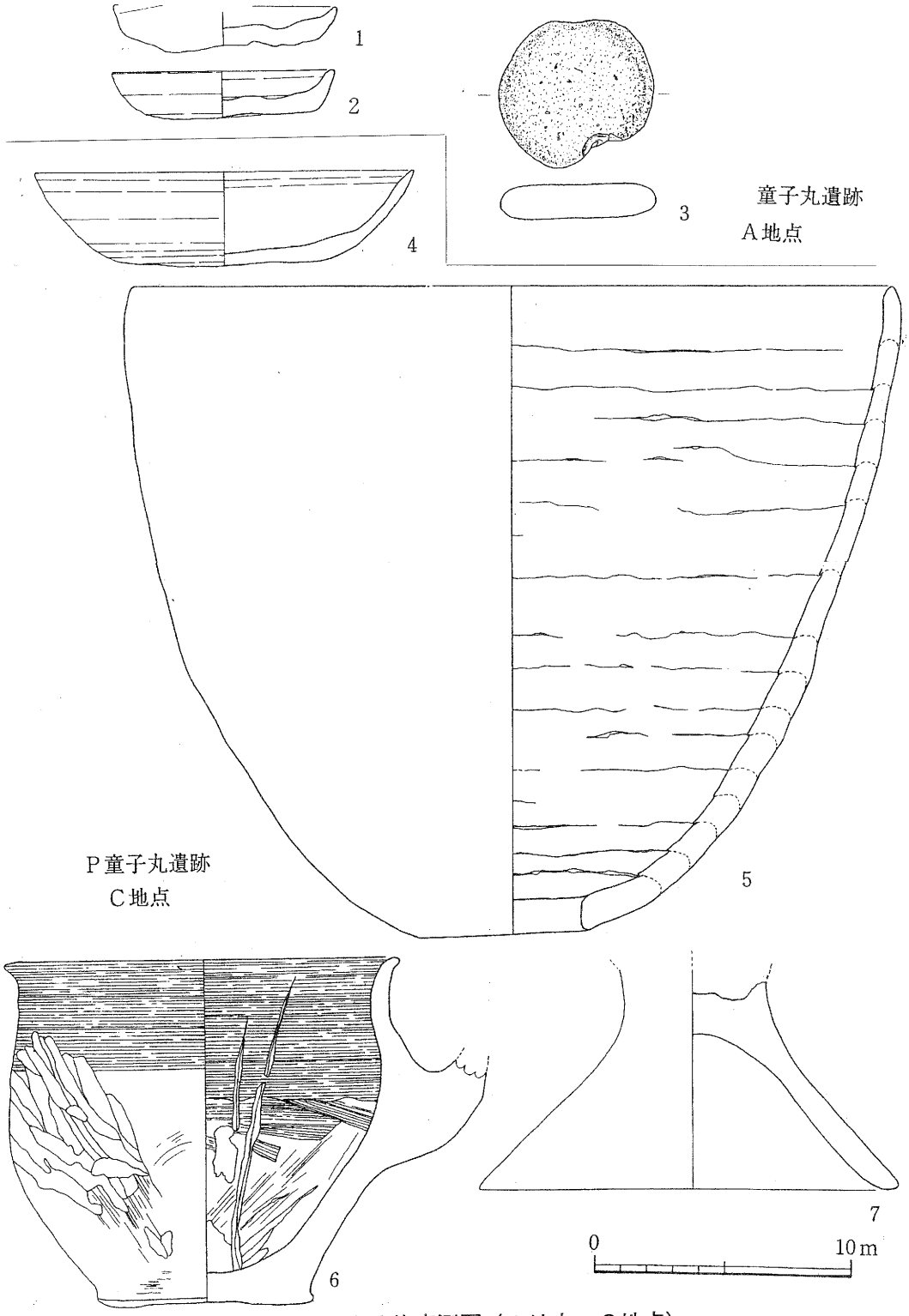
第5図寺崎遺跡E地点第1トレンチ土層図及び第3トレンチ平面・土層図



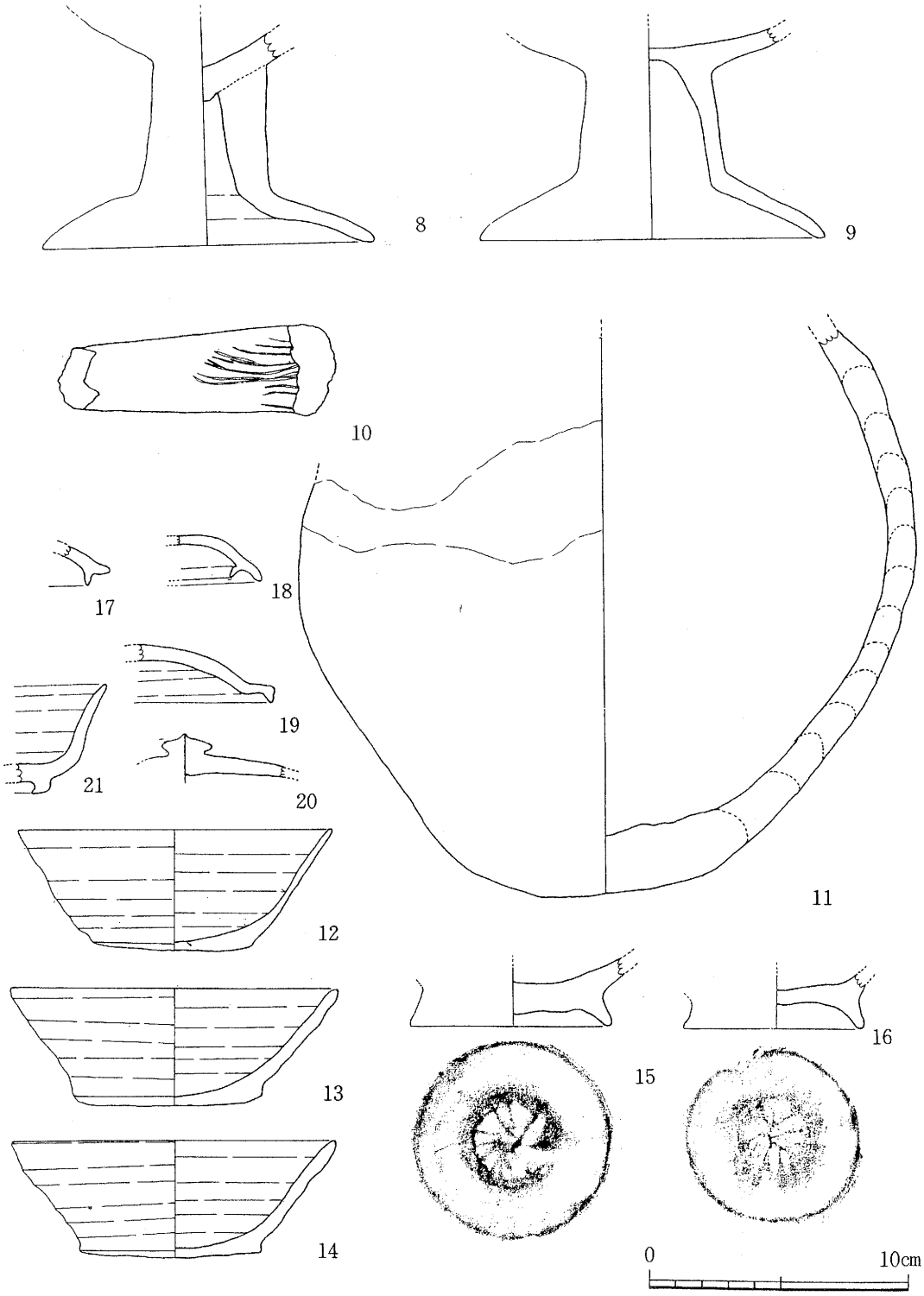
第6図　法元遺跡　H地点遺構分布図



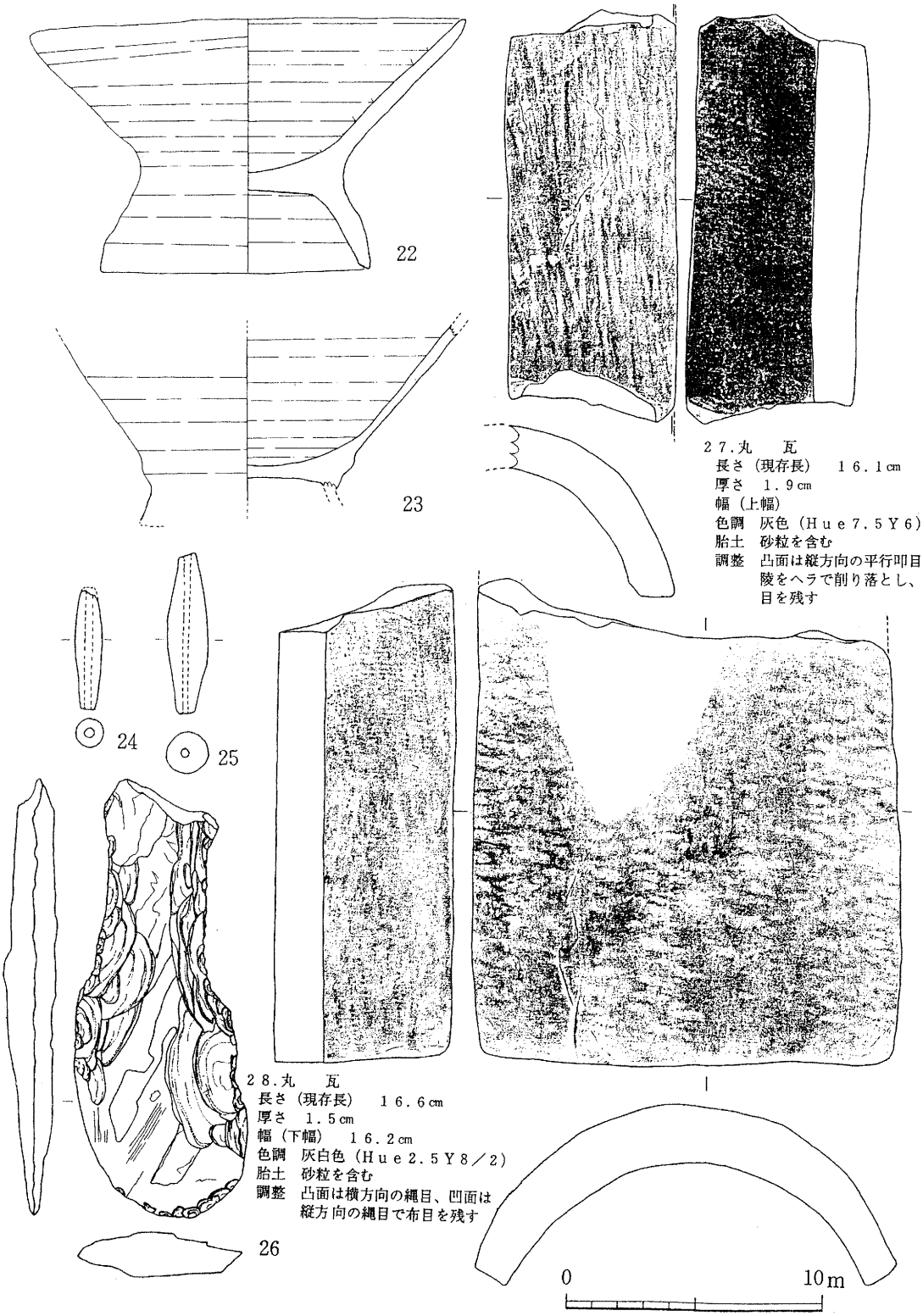
第7図上妻遺跡Ⅰ地点遺構分布図（第1トレンチ平面図・土層図）



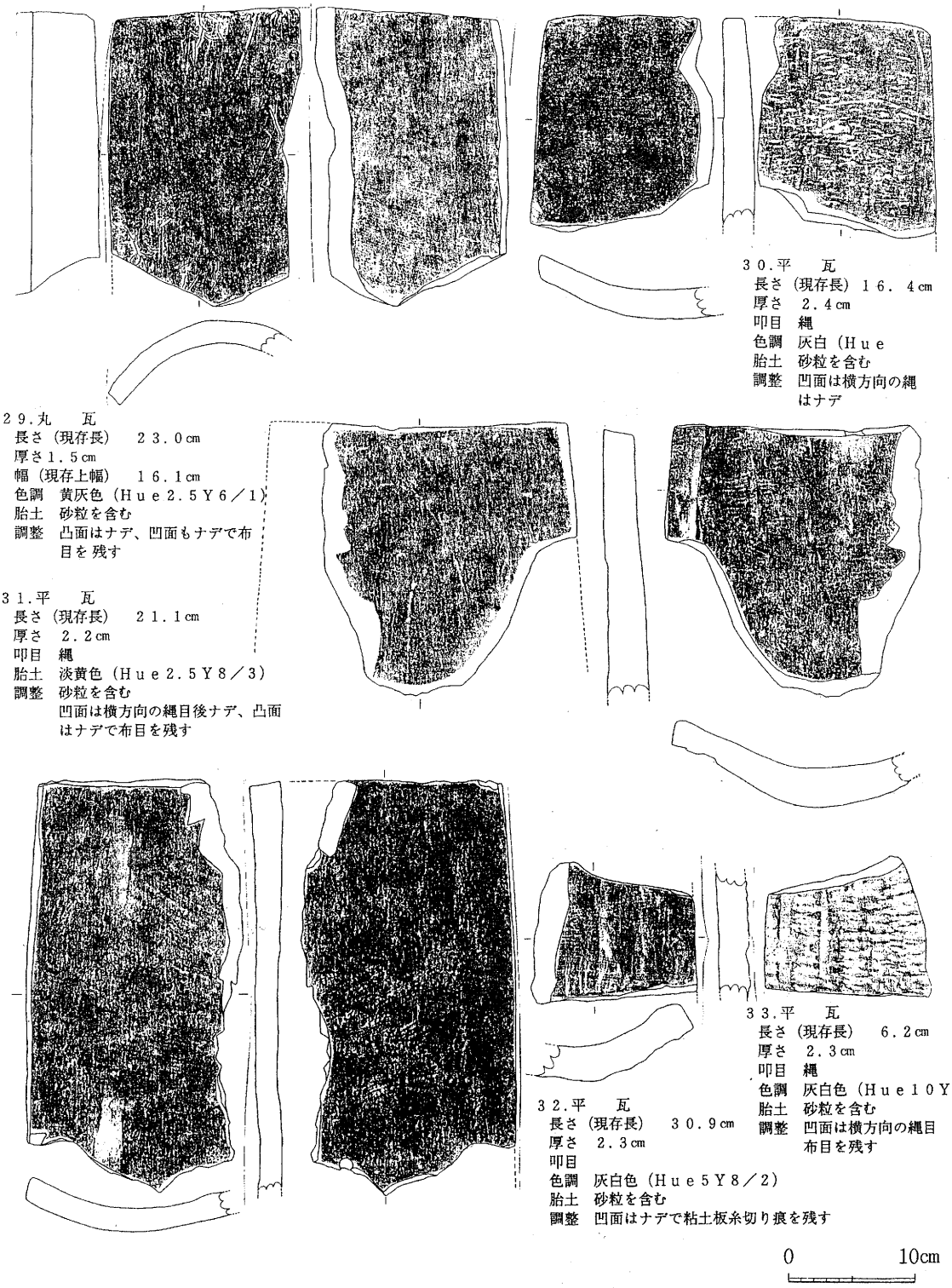
第8図　出土遺物実測図（A地点・C地点）



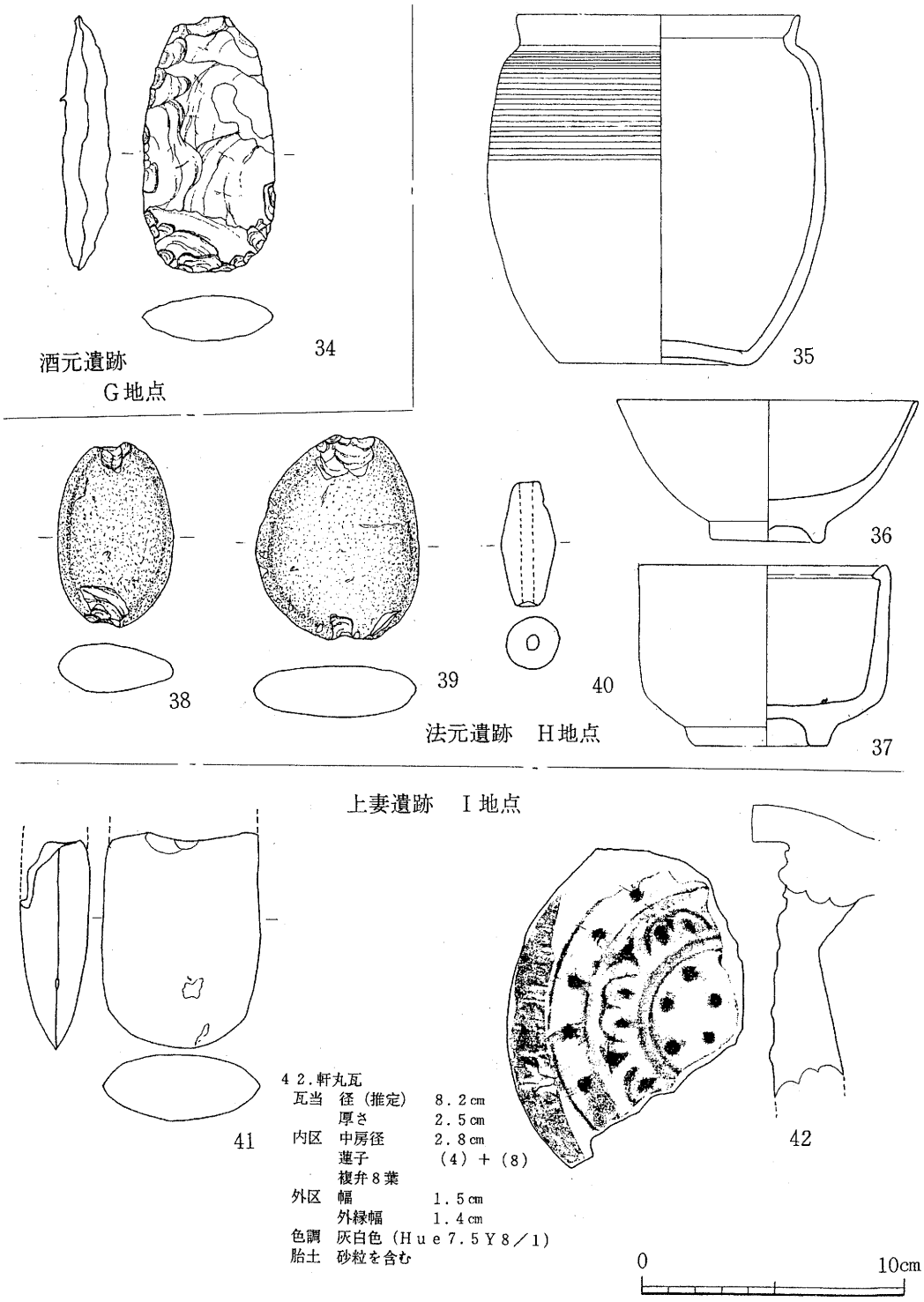
第９図　出土置物実測図・拓影（Ｅ地点）



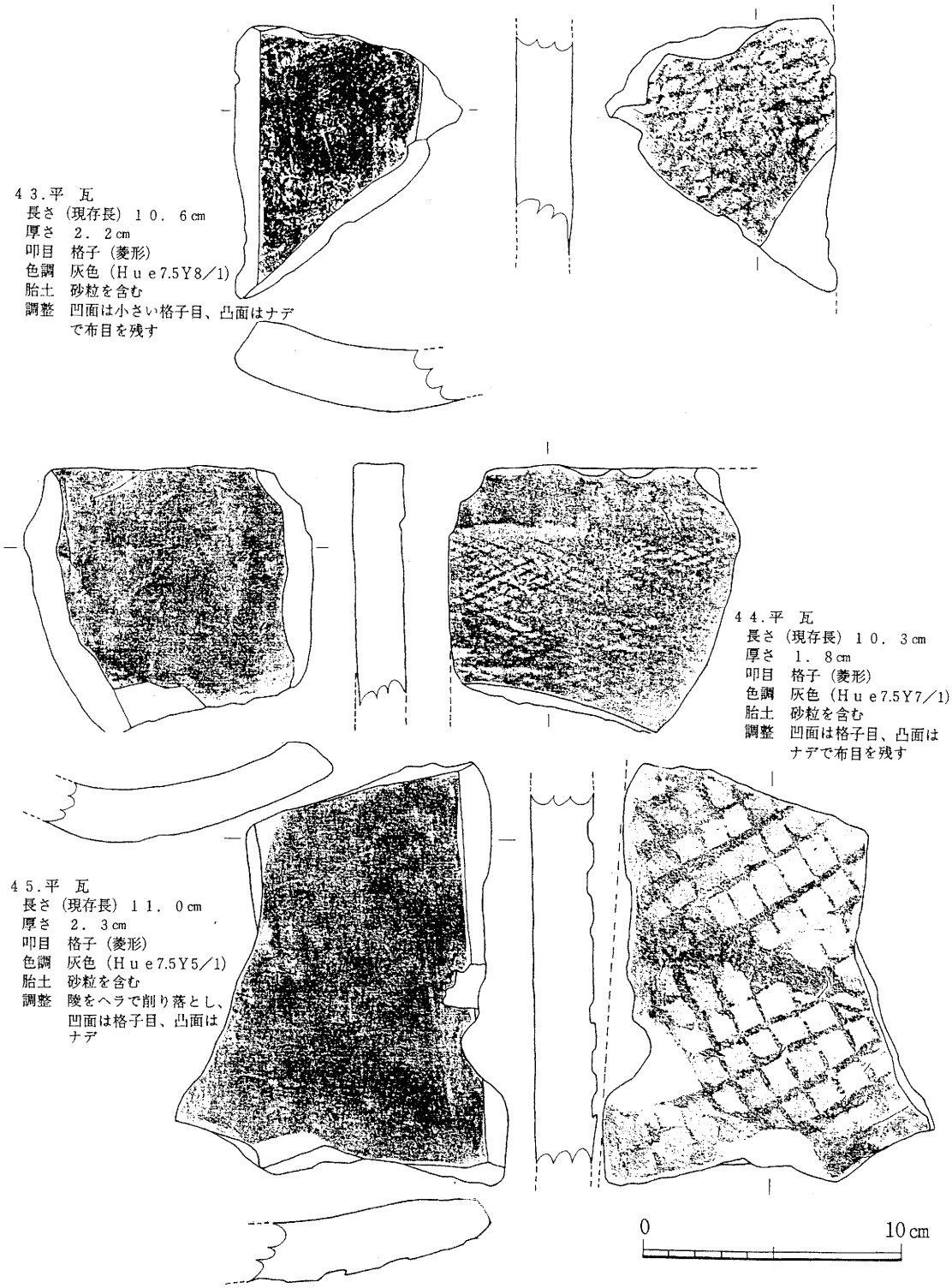
第10図　出土遺物実測図・拓影（E地点）



第11図　出土遺物実測図・拓影（Ｅ地点）



第12図　出土遺物実測図・拓影（G地点・H地点・I地点）



第13図　出土遺物実測図・拓影（Ⅰ地点）

ま　と　め

日高正晴

このたび行われた寺崎、法元、童子丸地帯の遺跡確認調査は、この地域が、西都原古墳時代から律令期にかけての集落地帯であったと想定されていることもあって、それなりに関心をもっていたのであるが、すでに、昭和二三年四月には、日向考古調査団によって、寺崎[1]遺跡の発掘調査も実施された。

ところで、今回の確認調査は、13カ所の地点でのトレンチ掘削によりものであったが、地域的に区分すると、まず、北の方、童子丸、石貫地区の遺跡では、A、B、C、Dの各地点、また、寺崎、法元地区の遺跡としては、E、F、H、I、J、K、などの各地点などを調査したが、さらに、この地域から西の方に少し離れて、酒元遺跡G地点、および堂ケ島遺跡L地点も発掘調査した。

さて、本年度の遺跡確認調査において、最も注目されることは、寺崎、法元地区の遺跡調査において、多量の布目瓦を出土する律令時代の遺跡を確認できたということである。これまで、この地域の字名である刎田（はねだ）からは時折、瓦が出土したことはあったが、発掘調査によって確認することができたのは、今回が最初である。現在、県教育委員会と西都市教育委員会と共同の国衙、郡衙、古寺等の調査が行われているが、このたびの遺跡確認調査は、前述した、主として県教委による律令期遺構調査に有力な資料を提供したことになる。

まず、法元、童子丸地区であるが、ここでの童子丸遺跡A地点、B地点の調査では、特別な遺構は確認できなかったが、A地点の西側に無号の円形墳が存在していたことから、この墳丘裾部の葺石は確認することができた。出土遺物としては、主として、土師器、須恵器などが認められたが、興味深かったのはA地点から縄目叩文の布目瓦が一点だけ検出されたことである。この童子丸A、Bの年代としては奈良時代から平安にかけての時期に推定される。さらに童子丸遺跡e地点からは、三カ所に住居跡が確認できたが、中でも、一号住居跡から出土した杯形須恵器片からはその編年も考察することができ、共伴した在地性の強い粒子入土師器の時期を六世紀後半頃に比定することができた。次に、寺崎、法元地区の確認調査について述べてみたい。ここでは、寺崎遺跡E、F地点、法元遺跡H、K地点、それに上妻遺跡I、J地点の六カ所を調査したが、そのうち法元H地点を除いては、すべての地点から布目瓦が出土した。しかし、寺崎F、法元K、上妻Jの各地点などからは、瓦がわずかしか確認されず、多量に瓦が出土した遺跡としては、寺崎遺跡E地点と上妻遺跡I地点の二カ所をあげなければならない。それからこの寺崎遺跡E地点は、以前、清野厳氏からかなり瓦が出土したという連絡をうけていた場所でもあったので、その調査については注目していたところである。調査結果は期待した通り土師器と共伴して布目瓦が多量に出土したが、主として横方向の縄目叩文の平瓦が主体をなし、軒先瓦は発見されなかった。そして、ほかの時期の瓦がほとんど混入していなかったことは、この寺崎E地点は奈良時代の遺跡であることも確認できた。なお、筆者らも調査員として参加した県教育委員会主催の日向[2]国分寺跡発掘調査（昭和三六年十二月）においても、全く同文様の縄目叩文が多量に出土した。なお、この奈良時代文化層の下層には弥生末期頃の弥生土器、有肩打石器なども出土し、そこに三カ所の住居跡も認められた。それから、すぐ南西に隣する寺崎F地点においても、小量ではあったが、布目瓦が出土した。次いで、この寺崎E地点から国道二一九号線を挟んで東北に約200メートルの上妻遺跡I地点の調査においても、E地点同様、多量の布目瓦が出土したが、ここでは複辨八葉の軒丸瓦が発見され、奈良時代遺構を確認づける資料を提供したことになる。また、この遺跡から出土した平瓦は寺崎遺跡E地点とは異り、格子目叩文を主体とした布目瓦であった。なお、この地点は、式内社都萬神社の裏側にあたる地域で、古代律令時代において、この地方を中心にして勢力を有していた日下部氏の本拠一帯でもあったので関心のもたれる場所でもあった。調査結果では、硬質の版築状土層および敷石遺構なども一部認められたので律令時代における何らかの遺構に関連が

あるのかもしれない。なおこの地域は、『日向国図田帳』に見える法元寺の存在した所でもある。さらに、この上妻Ｉ地点からすぐ北側の上妻Ｊ地点からも布目瓦が出土した。

このように考察してくると、寺崎、法元の調査地点からは、すべて布目瓦が出土していることになるが、ここで注目されることは、寺崎遺跡Ｆ地点のすぐ西側を道路が南北に直線状に走っており、また、稚児ケ池の堤の所からは直角に屈折して東西の道路となり、都萬神社の社前を通過している。この両道路は、古来からの道であり、もしかしたら、この南北、東西の道路は、律令時代の條里制の名残りかもしれないと思う。そして、この両道路に囲まれた方形状の区画内は、律令時代における何らかの官衙遺構が存在したとも推定できる。そのことは、昭和30年代に、この寺崎遺跡と童子丸遺跡の中間に国道219号線が開削された時、布目瓦が散見できたことでも一層、その推測を深くするものである。それから、特異な遺跡として、最後に、堂ケ島遺跡Ｌ地点をとりあげたい。この地点は、最も西寄りの石貫団地のすぐ南側に位置し、西都原古墳群台地の東側丘陵下で微高地状を呈している所であるが、ここで幅1.1メートル、深さ七五センチのＶ字溝が現れた。編年的には、弥生終末期頃に推定されるが、調査結果では、ほかにもＶ字溝の痕跡が認められる。このＶ字溝については、昨年度の遺跡確認調査で、下尾筋遺跡Ｃ地点において発見された弥生中期後半のＶ字溝に次いでの出土例であった。

註

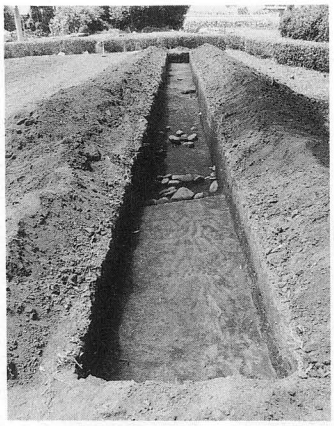
① 駒井和愛「宮崎県児湯郡西都市寺原及び寺崎の遺跡」
桜井清彦
『高千穂阿蘇』所収神道文化会　昭和35年12月

② 宮崎県教育委員会『日向国分寺址』日向遺跡総合調査報告第３輯
昭和38年３月

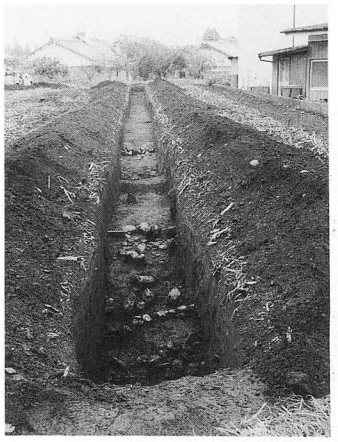
③ 西都市教育委員会『上尾筋遺跡、下尾筋遺跡』
西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集、平成２年３月

図　　版

図 版 1

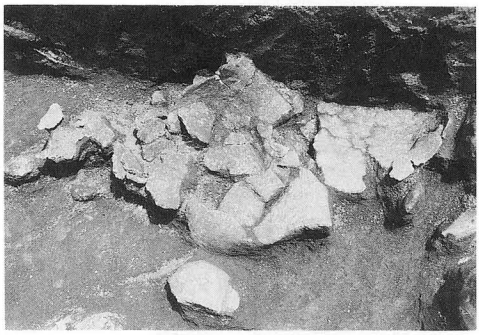


童子丸遺跡Ａａ地点第３トレンチ遺構検出状況

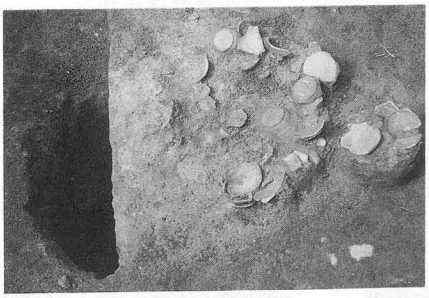


童子丸遺跡Ｂ地点第１トレンチ遺構検出状況

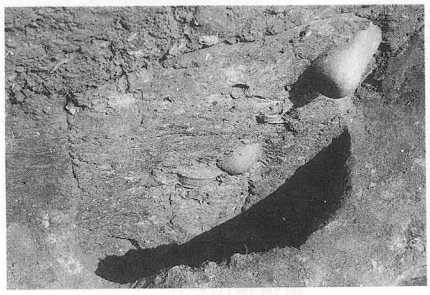
童子丸遺跡Ｃ地点第１トレンチ遺構検出状況



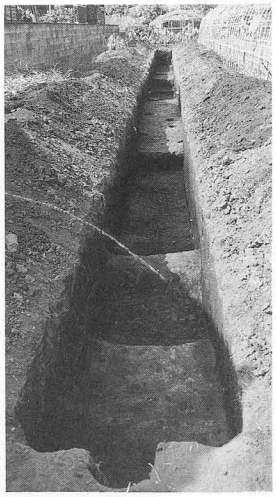
童子丸遺跡Ｃ地点１号住居址内遺物検出状況



寺崎遺跡Ｅ地点Ｐ　９遺物検出状況



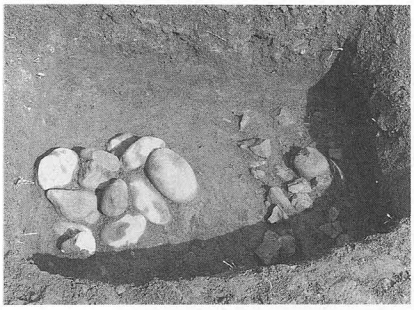
寺崎遺跡Ｅ地点Ｐ　９断面



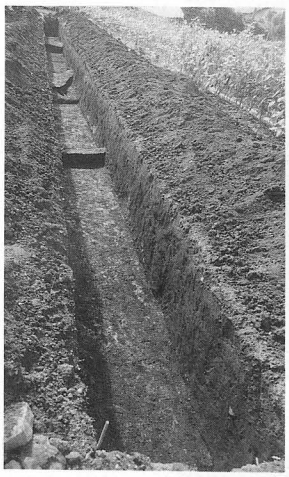
寺崎遺跡Ｅ地点第１トレンチ遺構検出状況

寺崎遺跡Ｅ地点第３トレンチ遺構検出状況

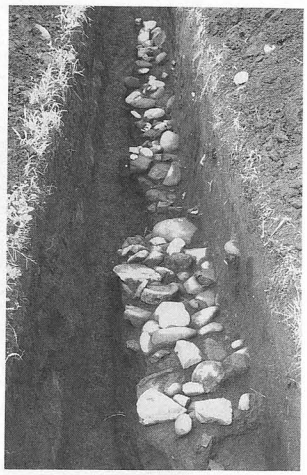
図 版 2



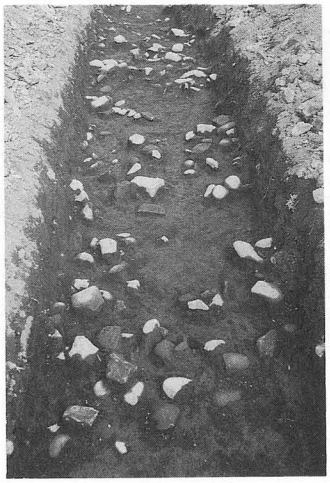
酒元遺跡Ｇ地点集石遺構検出状況



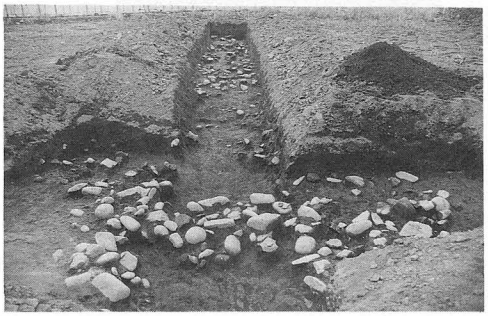
法元遺跡Ｈ地点
第１トレンチ遺構検出状況



法元遺跡Ｈ地点
第２トレンチ遺構・遺物検出状況

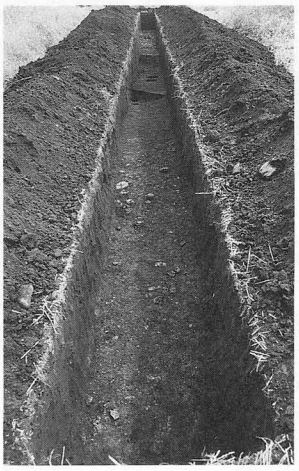


上妻遺跡Ｉ地点第１トレンチ遺構検出状況

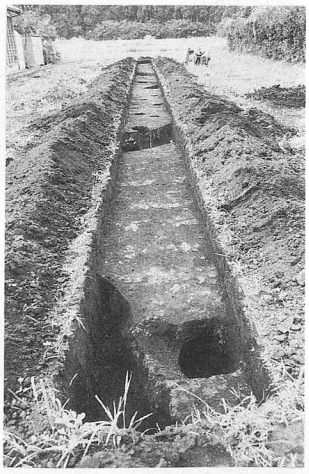


上妻遺跡Ｉ地点第１トレンチ遺物検出状況

上妻遺跡Ｊ地点遺構検出状況



法元遺跡Ｋ地点遺構検出状況

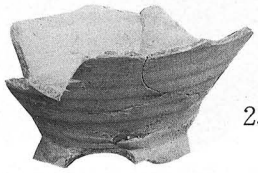


堂ケ島遺跡Ｌ地点第１トレンチ
遺構検出状況

図 版 3

図 版 4

22

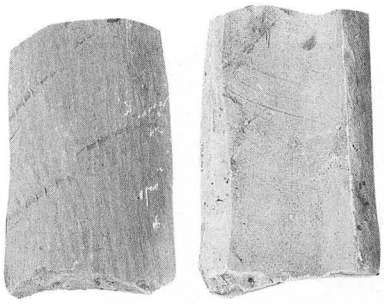


23

24

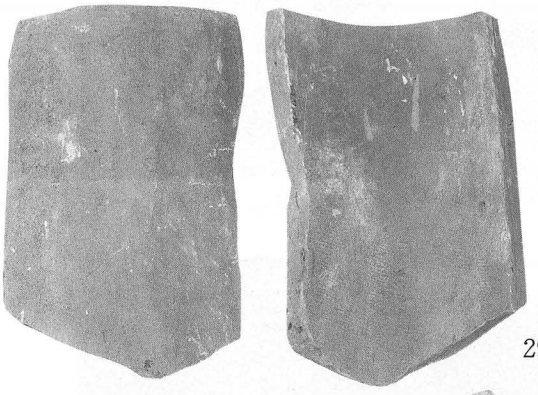
25

26



27

28

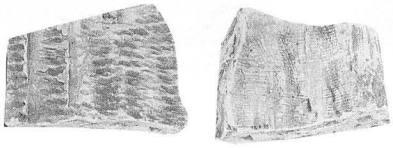


29

30

31

32



33

34

35

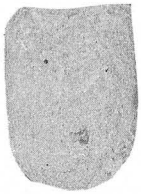
36

37

38

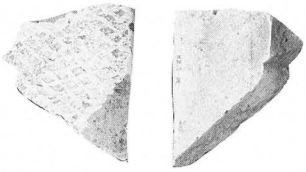
39

40

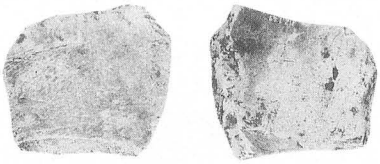


41

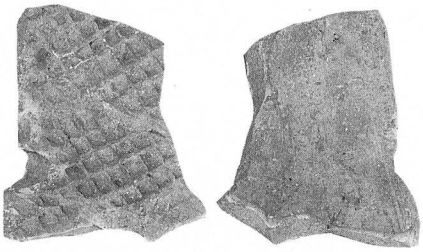
42



43



44



45

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書　第14集

平成３年３月31日発行

編集発行　西　都　市　教　育　委　員　会
印刷所　な　か　む　ら　印　刷　所